

2023年度 教職課程自己点検・評価

項目		成績評価に関する共通理解の構築		教員の養成の目標の達成状況(学修成果)を明らかにするための情報の設定及び達成状況				成績評価の状況	
観点		同一名称の授業科目を複数の教員が分担して開講している場合に成績評価の標準化を図ることができているか 等		教員の養成の目標の達成状況を明らかにするための情報が適切に設定され、達成されているか、教職実践演習に向けた「履修カルテ」を適切に活用できているか 等				各授業科目の到達目標に照らして達成水準を明らかにし、厳格に点数・評語に反映することができているか、達成水準を測定する手法やその配点基準が明確になっているか 等	
学科等	評価	現状(長所・特色/問題点など)	次年度に向けた改善施策	評価	現状(長所・特色/問題点など)	次年度に向けた改善施策	評価	現状(長所・特色/問題点など)	次年度に向けた改善施策
全学共通教育センター	適	中高教職課程のうち、全学が主開設の科目の場合、同一名称の授業科目を複数の教員が分担して開講しているのは教職実践演習のみである。当該科目においては、シラバス作成時に評価方法と規準、各ウェイトを担当者内で検討・確認し、統一したものを明記している。履修学生に対しても、初回の合同授業時に統一見解を周知している。ただし、成績評価後の評価の妥当性の確認、ならびに、評定のばらつきは十分に点検できていない。	成績評価後の評価の妥当性の確認、ならびに、評定のばらつきについて、定期的に確認作業を行うようにし、より一層の公平性を担保するようにする。	適	基本的には各授業科目で設定した到達目標をクリアすれば、教員養成の目標(特に教育の基礎的事項ならびに各教科教育法に関する部分)を達成できるようにデザインしている。なお、各授業科目において「良」以上の成績を得ているかどうかを判断の目安にしている(ただし、「可」が多い場合のサポートは十分に提供できていない)。なお、教職内規において2年次終了時点の成績基準を設けており、その基準を下回る場合は、原則、その後の教職課程履修継続を認めない。対象者は決して多くなく、総じて良好な学修状況である。また、「履修カルテ」は年度ごとに記録・提出を求め、それを閲覧し、教職指導に生かしており、特に教職実践演習ではその記載内容をもとに授業内容の工夫等を実施している。	「可」が多い場合は、要サポート対象としてみなし、可能な限り、授業内外において、必要な働きかけやサポートをできるように検討する。	適	到達目標との関連で、適切な評価方法と規準、各ウェイトが設定されているかどうかは、シラバス査読時にチェックしており、不適切な場合は、授業担当者に修正を依頼するようにしている。その点で一定の妥当性を確保している。ただし、具体的な評価課題の内容やその詳細な評価手続きは担当者に一任しており、あいまいさは残る。ただし、IRデータで過度に甘い評価や厳しすぎる評価の有無は各期ごとにチェックし、必要に応じて、担当者との協議のもと、是正対応を行っている。	具体的な評価課題の内容やその詳細な評価手続きをお互いに共有し、学びあう機会の創出を検討する(手始めに専任教員間では始めることから)。
日本語日本文学科	適	初年次教育としての基礎演習では、授業開始前および授業終了後に打合せ・振り返りを行い、各教員の持ち味を生かしつつ、内容の等質化を実現できるよう、情報共有に努めている。また、成績評価についても、基準を設けられつきが出ないようにし、成績評価に偏りが出そうな場合には他教員と協議する体制をとっている。	次年度も打ち合わせを密に行い、内容・評価方法についても検討を重ね、時代に合わせた初年度教育が提供できる体制を維持する。	適	教職継続には内規を設けており、教職履修者には開示の上、一定水準以上の学力担保を求めている。内規抵触者は原則として教職履修の継続はできないが、特段の事情・確固たる意志のあるものについては復活の内規も設けたうえで、厳しく指導している。また、「履修カルテ」の記録・提出を求めた上で、教務部委員が全員分確認している。	内規抵触の上復活を望む者については、より厳格な対応が求められる。復活の条件の検討や、対象者の学習指導の在り方について検討したい。また、履修カルテ、教育実習日誌等から課題が見つかることも多いため、学科内での情報共有をより密にしていきたい。	適	シラバスに到達目標・成績評価の方法は開示しており、シラバス登録時に学科でチェックしている。また、IR推進委員会からの成績分布資料等は科会等で共有し、成績分布や評価方法の適正化に努めている。	学科全体としての成績評価の厳格性は保たれていると思われるので、今後も厳正な成績評価に努めるべく、各種資料を参照しながら学科全体での情報共有に努める。
歴史文化学科	適	江戸時代論が該当する科目で、同科目では、シラバス作成時に評価方法、各評価基準の配点比率を担当者内で検討・確認の上、明記している。履修学生に対しても、初回の授業時に評価方法を周知している。	次年度は、科目整理により「江戸時代論」は閉講となり、同一名称の授業科目を複数の教員が分担して開講している科目はなくなる。	適	教職内規で2年次終了時点の成績基準を設け、その基準を下回る場合は、教職課程履修の継続を認めない。「履修カルテ」の記録・提出を求めた上で、教職指導や演習に活用している。	教育実習前の科会等の機会に、教育実習先への訪問日程調整のみならず、「履修カルテ」を元にした教員間での情報共有や交換を通じて、教員養成をより深化させていきたい。	適	到達目標に対する達成水準や評価基準につき、シラバス査読時にチェックし、不適切な場合、授業担当者に修正を依頼している。また、IRデータを参照し、極端な評価がなされている場合、必要に応じて担当者との協議や是正を行っている。	評価を行う上での課題の具体的な内容や、詳細な評価手続きを教員間で情報交換や共有した上で、改善につなげる学びを得る機会の創出を検討する。
英語コミュニケーション学科	適	共通シラバスを使用して、コースコーディネーターがミーティングを招集して、授業の運営方法、評価方法について説明することで、共通理解のもと、授業を進めている。習熟度別クラス編成のため、評価についてはグループごとの目安を定めている。	特に問題なく授業が進められているので、現状を継続していきたい。	適	「履修カルテ」を参考に、教職の基準にかかってしまう学生と面談して、意思確認を実施している。続行不可能な学生には教職辞退を促している。	特に問題なく授業が進められているので、現状を継続する。	適	シラバスに到達目標を明記し、評価方法も記載している。学生はこれらを確認して、授業に臨んでいる。	学生から評価についての問い合わせが入ることもあるが、担当教員が行う評価理由の説明に納得しているため、今後も丁寧な対応を続けていく。
心理学科	適	教員間のコミュニケーションを積極的に行い、成績評価に関する共通理解を図るとともに、成績評価の標準化を行ってきた。一部の科目に関しては、成績評価を実際に共有・閲覧してきた。	教員間のコミュニケーションを引き続き積極的に行い、成績評価に関する共通理解や標準化を図っていく。担当教員が変更になった場合には特に留意する。	適	教員の養成の目標の達成状況(学修成果)を明らかにするため「教職履修カルテ」を活用し、4年次には「教職実践演習」での振り返りにも用いている。	「教職履修カルテ」を引き続き活用していく。その他、教員養成の目標の達成状況(学修成果)について、学生に活用を促していく。	適	シラバスには、授業到達目標や評価基準、評価の方法、配点基準を明記しており、それに基づいて成績評価を行っている。	引き続き、シラバスには授業到達目標や評価基準、評価の方法、配点基準を明記し、それに基づいた成績評価を行っている。担当教員が変更になった場合には特に留意する。
現代教養学科	適	IR推進委員会ですされる学科専門授業の成績分布データをメールや学科会議で共有し、自らの担当する授業の成績が全体の分布の中でどの位置に属するのか周知に努め、その中で共通理解の構築を図っている。	引き続きIRデータの注視に努める。また、成績分布の中で外れ値となる授業を担当する教員に対して、その状況が継続されるようであれば、個別にアプローチし、理由・状況の把握や、標準化への促しを行う。	適	毎年度、教職課程履修者が作成する「履修カルテ」の記入状況を、学科教務部委員が、当年度の履修・成績状況と合わせて確認。もし、達成が危ぶまれる場合は、面談などを積極的に行い、生活状況や学習計画に対するアドバイスを積極的に行っている。	原則、現在は教員養成の達成状況については、教務部員が担当しているが、CAや必修ゼミの担当教員とも積極的な情報共有を図り、より丁寧で実効性のある指導体制を検討したい。	適	各科目の成績評価(達成水準の測定)の方法については、全学的にシラバスに項目と配点を記載することを義務付けている。さらにシラバスの作成時に、学科長と教務部委員がダブルチェックを行い、これらの記載が適切になされているかを確認している。	教員・教務側によるチェックだけでなく、FDアンケートなども活用し、学生側からの成績評価に疑問が多い授業に関する情報収集に努める。また、必要であれば担当教員から事情を聞き、状況の適正化に努めたい。
健康デザイン学科	—	同一名称の授業科目を複数の教員が分担して開講している科目は無い。	—	適	・成績不良科目は10科目以上の場合には教育実習に行かせない ・それ以下の場合には復活条件をつけて学生の到達度を保証 ・「履修カルテ」を教務部委員・学科長・CAで共有	特に問題なく授業が進められているので、現状を継続する。	適	・シラバスの記載通りの成績を評価している ・GPAにて達成水準を推定	特に問題なく授業が進められているので、現状を継続する。
管理栄養学科	—	同一名称の授業科目を複数の教員が分担して開講している科目は無い。	—	適	教職課程履修に関する内規により2年次終了時点の専門教育科目の成績基準を満たしていない場合は、学科会議で確認し、教職課程履修の継続を認めない。担当教員およびクラスアドバイザーが、「履修カルテ」を参照して学生の履修状況を把握している。	「履修カルテ」の教員間および学生と教員の双方向性の活用が十分であると言えない。「履修カルテ」をさらに有効に活用していきたい。	適	シラバスに明記されている評価基準に基づいて成績評価を行っている。GPAのヒストグラムを前年度と比較し(IR推進課)、昨年度の課題が解決しているか、適切な評価がなされているか点検を行っている。	授業科目の到達目標に照らして、できる限り定性的にまたは定量的に達成水準を明らかにし、達成水準を測定する手法やその配点基準があらかじめ明確にする。
初等教育学科	適	同一名称で複数の教員が分担して開講している科目は「情報機器の操作」「音楽演習A」「音楽基礎A」「教育学基礎演習1」等がある。各授業、同一内容のシラバスを用いて授業を行っており、成績評価もシラバス記載通りに行っている。特定の分野に特化した内容の授業回については、担当した教員が同一名称科目履修者全員の評価を行う等成績評価の標準化を図っている。実技を伴う授業では担当教員間で情報共有をし、個人のレベルにあった課題に対する評価を行う等の工夫をしている。	各期授業開始前・成績評価前に科目担当で評価の観点や採点基準を確認する場を設け、教員間で評価の開きがないよう配慮をする。授業内でシラバスの説明をし、採点基準の説明を行う。また、成績入力前には、同一授業科目担当者間で、成績評価の照らし合わせを行い、成績評価の標準化を図ることができるようになる。	適	カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーについては定期的に確認・検討を行っている。学生には入学時に説明をする他、定期的に開催する教務ガイダンスで説明をしている。また、保護者懇談会等で保証人にも説明の機会を設けている。入学年度に教職履修カルテを配布し、活用方法を説明している。	昨年までの「善き教師への道(旧履修カルテ)」を今年度入学生から「履修カルテ」とし、活用一年目となる。教職実践演習(保育・教職実践演習)授業担当者と連携をとりながら、学生が自己評価を重ねる中で学習状況や自己の課題を認識できるよう、指導を重ねていきたい。	適	各授業のシラバスに授業到達目標及びテーマ、評価基準と評価の方法を記載している。公開前に所属長、教務部委員による確認を行っている。また、各学期の成績分析結果により外れ値になった科目については教務部委員から授業担当教員に確認を行っている。	GPAに算入されない認定科目も、達成基準を満たしており、評価の公平性は担保されている。事前に学生に到達基準を周知することを今後も継続していきたい。